

## 夜も安全に避難誘導インパクト 大分市が看板開発

おすすめ0 ツイート

高輝度蓄光製品を開発・販売する「インパクト」（大分市東春日町）は、夜間に少ない消費電力で長時間発光し、視認しやすい避難誘導看板「ブルーインパクト」を開発した。災害などによる停電時に避難者の誘導に役立つ。東京五輪・パラリンピックに向け、競技会場や観光客が利用する施設に売り込んでいく。

光エネルギーを蓄えて発光する蓄光板と、発光ダイオード（LED）を組み合わせた看板。周囲が暗くなると避難情報を記した蓄光板が発光する。LEDによって夜間、蓄光板に光エネルギーを供給する。LEDの電力は備え付けの太陽光発電パネルと蓄電池で賄うため、外部電源は必要ない。

LEDで直接表示板を光らせる方式に比べ、低消費電力で文字の認識がしやすく、明るさのばらつきが少なくなるという。LEDは満充電状態なら1日14時間で10日間点灯。暗間でも視認しやすい青緑色の蓄光を用いることで、600メートル先からでも認識できる。価格は、縦横各1メートルの蓄光板サイズで280万円（税別）。

従来商品の蓄光板単体の避難誘導標識をLED併用に改良し、2017年2月に特許を取得した。同社の佐藤美保恵社長は「日本は他国に比べ、地震が起きやすい。夜でも地震は起きるため、安全で迅速な避難ができる看板を作りたい」と開発理由を話す。

16年9月に大分市のトライアル発注事業者認定も取得。今春開校した同市の碩田学園など県内計5施設に納入した。同市教育委員会の池辺誠教育部次長兼学校施設課長は「碩田学園は地域の人たちの要望もあり、防災面に力を入れた。真っ暗でも遠くから認識できるため採用した」と話す。

他県からの注文もあり、販路を拡大している。東京五輪・パラリンピックに照準を合わせ、地図記号など外国人向けの看板や、明るさの調整が可能な商業用看板などの商品展開を模索している。

※この記事は、6月19日大分合同新聞朝刊1ページに掲載されています。



【右】蓄光板とLEDを組み合わせた避難誘導看板「ブルーインパクト」。上部に太陽光発電パネルを備えるため外部電源が要らない【左】蓄えたLEDの光エネルギーによって夜間に発光する。視認しやすい青緑色の光を採用した＝大分市の碩田学園南門



【右】蓄光板とLEDを組み合わせた避難誘導看板「ブルーインパクト」。上部に太陽光発電パネルを備えるため外部電源が要らない【左】蓄えたLEDの光エネルギーによって夜間に発光する。視認しやすい青緑色の光を採用した＝大分市の碩田学園南門